

1.2.6 荷重と外力

(A) 荷重の組み合わせ

- ☆ 荷重の合成：地震と風は同時に生じないものとする、ただし多雪地域の場合には地震+積雪、風+積雪はあり
- ☆ 荷重の合成：暴風時・地震時の応力算定において積載・積雪荷重を除く場合もあり（積載無くなると引張が増える事あり）
- ☆ 荷重の合成：一般的に地震発生時が短期荷重最大となるが、建物の特性により暴風時の方が大きくなる場合もあり

(B) 固定荷重

- ☆ 単位重量：普通コンクリートは立米あたり 23kN、高強度コンクリートは 23.5kN、鉄筋分は 1kN プラス

(C) 積載荷重

- ☆ 荷重の大小：床設計用 > 柱・はり・基礎設計用 > 地震力算定用
- ☆ 荷重の大小：集会所（固定席ではない）> 事務室=店舗=集会所（固定席）=学校のパルコニー> 教室> 病室=居室
- ☆ 積載荷重：連絡通路では、一般の室よりも大きい（百貨店の売り場だろうが何だろうが連絡通路はその他の用途、避難時を想定）
- ☆ 積載荷重：百貨店屋上の積載荷重は、売り場の積載荷重相当
- ☆ 積載荷重：劇場の積載荷重：固定席の場合よりもその他の場合の方が大きい（理由は以下）
- ☆ 積載荷重：平面に均等に荷重がかからない場合（局所荷重）の方が積載荷重は大きくなる可能性あり
- ☆ 積載荷重：柱の垂直荷重による圧縮力算定時には、支える床の数において積載荷重を低減可能（劇場など・倉庫は除く）
- ☆ 積載荷重：許容応力度計算で使用する荷重と限界耐力計算で使用する荷重は同等

(D) 積雪荷重

- ☆ 積雪荷重：積雪の単位荷重×屋根の水平投影面積×その地方の垂直積雪量
- ☆ 積雪荷重：3ヶ月以上荷重継続期間がある場合は長期荷重とみなす、また長期積雪荷重は短期積雪荷重の0.7倍とする
- ☆ 単位荷重：積雪 1cm あたり 20N/m²以上、ただし不均一に雪が分布している方が荷重が大きくなる場合もある
- ☆ 垂直積雪量：「その区域の標高・海率」「周辺地域等の観測資料」より算定
- ☆ 多雪地域：積雪量 1m 以上、または積雪期間が年平均で 30 日間以上ある地域 ← 長期荷重になるので注意
- ☆ 低減：屋根勾配により低減可能、また勾配が 60° を超える場合は積雪荷重は 0、雪下ろしを行う地域では最大深度 1m
- ☆ 低減：最大深度 1m の低減を行った建物には、出入口・主要な居室等に低減の実況・必要事項を記載すること

(E) 風荷重

- ☆ 風荷重 (W)：風圧力 (P) × 見付け面積 (受風面積のようなもの…)
- ☆ 風圧力 (P)：風力係数 (Cf) × 速度圧 (q)
- ☆ 風圧力 (P)：構造骨組み用圧力よりも外装材用のほうが大きい（構造部材には間接的に荷重がかかるので）
- ☆ 風力係数 (Cf)：風洞実験もしくは建築物の断面・平面形状から算出
- ☆ 風力係数 (Cf)：閉鎖型の建築物における風力係数は、建築物の外圧係数と内圧係数を用いて求める
- ☆ 風力係数 (Cf)：高さ 13m 以下の建築物の屋根ふき材への風圧力算定時においても、規定の風力係数を用いることが可能
- ☆ 風力係数 (Cf)：屋根の軒先などの局所の風力係数は屋根面・壁面よりも大きくなる場合がある



- ☆ 速度圧 (q) : $0.6 \times E \times V_o^2$ 、ただし E : 屋根高さ・周辺状況、 V_o : 基準風速 (地表面粗度区分による)
- ☆ 基準風速 (V_o) : 稀に発生する暴風時の地上 10m における 10 分間の平均風速に相当 (30m/s~46m/s)
- ☆ 平均風速の高さ方向の分布を表す係数 : 平坦で障害物が無い地域 > 都市化が極めて著しい地域 ← 地表面粗度分布
- ☆ 地表面粗度区分 : 決定には、都市計画区域指定の有無、海岸線からの距離、建物高さ等を考慮
- ☆ ガスト影響係数 : 風の時間的変動を考慮するために使用する
- ☆ ガスト影響係数 : 建物高さに比例して小さくなり、都市化が著しい地域の方が平坦で障害物の無い地域よりも値が大
- ☆ 風揺れ : 超高層建築物は風方向よりも風直交方向の方が揺れが大きい
- ☆ 風揺れ : 風直交方向の振動 (風方向よりも大きいですよ)、ねじれ振動についても安全性の確認を行う
- ☆ 吹き上げ : 緩い勾配 (10 度以下程度) の片流れ屋根への水平な風は、屋根面に対して吹き上げ力として作用
- ☆ 吹き上げ : 屋根周辺や庇部分は局部風圧が高くなる可能性があるので留意する (吹上力等を考慮する)
- ☆ 荷重方向 : 風荷重は水平のみとは限らない ← 傾斜した面 (屋根面) に鉛直荷重として作用
- ☆ 制振装置 : 強風時の振動を抑えることが可能になり居住性能が向上する (塔状の建物にも有効)

(F) 地震荷重

- ☆ 地震層せん断力 (Q_i) : 地震層せん断力係数 (C_i) \times 対象層以上の総重量 (W_i)
- ☆ 対象層以上の総重量 (W_i) : 多雪地域においては積雪荷重も建物自重に含める
- ☆ 対象層以上の総重量 (W_i) : 建物を軽量化する程地震力を低減できる
- ☆ 地震層せん断力係数 (C_i) : 地震地域係数 (Z) \times 振動特性係数 (R_t) \times 高さ分布 (A_i) \times 標準せん断力係数 (C_o)
- ☆ 地震層せん断力係数 (C_i) : 建物高さが高くなるほど小さくなる、上層部ほど値が大きい
- ☆ 地震層せん断力係数 (C_i) : 固有周期が長い、地域係数が小さい場合には、 C_o よりも小さくなる ($Z \times R_t \times A_i$ が 1 以下となる)
- ☆ 地震地域係数 (Z) : 地域により異なり、本州太平洋側が最も大きく (1.0)、沖縄地域が最も小さい (0.7)
- ☆ 地震地域係数 (Z) : 広告塔等の地震地域係数は 0.5Z 以上、突出部では 1.0Z 以上
- ☆ 振動特性係数 (R_t) : 地盤が固いほど (第一種地盤) 値が小さい、固有周期が長いほど (高層な建物ほど) 値が小さい
- ☆ 振動特性係数 (R_t) : 岩盤・硬質砂礫層などは第 1 種地盤 (地盤)、沖積シルト層深さ 30m 以上などは第 3 種地盤 (軟弱)
- ☆ 高さ方向の分布係数 (A_i) : 建物上層部ほど値が大きい、また固有周期 T (1 次固有周期) が長いほど値が大きい
- ☆ 標準せん断力係数 (C_o) : 1 次設計 0.2 (木造軟弱地盤/低層 S 造は 0.3)、2 次設計 (保有水平耐力・層間変形など) 1.0 以上
- ☆ 地下部分 : 地下部分の地震力は、固定荷重と積載荷重の和に水平震度 (k) を乗じて求める
- ☆ 地下部分 : 地下部分の地震層せん断力 = 地下部分の地震力 (上記参照) + 1 階部分の地震層せん断力
- ☆ 水平震度 (k) : 地下部分の地震力計算に用いる水平震度 (k) は、深いほど値が小さい、ただし 20m 以下は一定値
- ☆ 水平震度 (k) : 屋上から突出する煙突等の地震力計算に用いる水平震度 (k) は、地域係数に 1.0 以上の値をかけて求める
- ☆ 突出部 : 塔屋・屋上からの突出物などは、建物全体に比べ大きな加速度が作用する
- ☆ 設計用地震力 : 同じ規模の建物の場合、固有周期が長いほど値が小さくなる (振動特性係数も小さくなるしね)
- ☆ 震度階とマグニチュード : 算定方式が異なる (マグニチュードは地震そのものの大きさ、震度階は当該地の地震の大きさ)
- ☆ 必要保有水平耐力 (Q_{un}) = 水平力 (Q_{ud}) \times 構造特性係数 (D_s) \times 形状係数 (F_{es})
- ☆ 大規模地震を対象とする限界耐力計算における水平保有耐力算定時には構造特性係数 (D_s) は使用不可
- ☆ 地震の荷重は水平のみとは限らない ← 荷重計算では水平のみですが…
- ☆ RC 造事務所建築では、地上部における地震力計算用荷重 (固定荷重と積載荷重の和) は床面積 1m² あたり 10~15kN 程度



1.3 地盤と基礎

1.3.1 地盤

(A) 土粒子

☆ 粒径の大小：砂 > シルト > 粘土

(B) 地盤の種類

☆ 耐力：洪積層 > 沖積層（氷河期から現在までに堆積した地層、軟弱なものが多い）

☆ 堅いローム層の長期許容応力度は 100kN/m²を採用可能、密実な砂質土層における長期許容応力度は 200kN/m²

☆ 地盤の許容応力度：岩盤 > 密実な砂質地盤 > 粘土質地盤

☆ 固有周期：第三種地盤の地盤周期は $T_c=0.8$ 秒

(C) 地盤調査

☆ 平板載荷試験：調査可能範囲は板幅の 2 倍程度の深さまで

☆ 平板載荷試験：長期許容支持力度を算定時、極限支持力の 1/3、もしくは最大荷重度の 1/3 の何れか小さい方を採用

☆ 標準貫入試験：砂質土では N 値が大きいほど内部摩擦角は大きくなる、N 値 5 の場合では砂質土は緩い地盤、粘性土は非常に固い（N 値が同じ場合、地盤の許容支持力は砂質地盤よりも粘土質地盤の方が大きい）

☆ 圧縮試験：一軸圧縮試験は粘性土の強度を調べる試験、粘性土の摩擦力、変形係数、非排水せん断郷土等の算定が可能

☆ 圧縮試験：三軸圧縮試験は拘束圧を作用させた状態における圧縮強さを求める試験、土の粘着力、内部摩擦角の算定が可能

☆ ボーリング孔内水平積荷試験：杭の水平耐力を検討する際に用いる変形係数を推定可能、水平地盤反力係数を求めることも可能

☆ ボーリング孔内水平積荷試験：杭孔全長に渡って行う（地表層付近のみで行う調査ではない）

☆ ボーリング調査時の試料採取：砂質土の方が粘土よりも困難、安定に運搬し室内の実験室で詳細な調査を行う

☆ ボーリング調査：建築面積が 2,000 平米の建築物におけるボーリング調査の本数は、建築物の四隅付近 4 箇所でよし

☆ スピンドル式サウンディング試験：荷重による貫入と回転貫入を併用した試験、地表近傍地盤の静的貫入特性を調査、ハンマー未使用

☆ スピンドル式サウンディング試験：比較的小規模な建築物対応の試験、加力の上限があるので算定可能な許容応力度にも上限あり

☆ 圧密試験：粘性土の沈下特性（圧密降伏応力・圧縮指数・圧密係数等）を求める際に用いる

☆ 地盤周期測定：常時微動測定、せん断波速度測定等を行う

☆ 地盤特性：超高層建築物においては、地盤の構造と動的特性を把握するために P 波と S 波の速度分布を調べる地盤の PS 検層が必要

(D) 砂と粘土の比較

☆ 土質比較：内部摩擦角⇒きれいな砂>シルト、粘着力⇒硬質粘土>シルト

☆ 土質比較：砂質土では即時沈下・液状化、粘土層では圧密沈下に注意

☆ 土質比較：砂質土の方が粘土よりも透水係数が大きい、間隙比は小さい

☆ 含水比（含水率）：細粒土含有率大きくなるほど増加する

☆ 圧密沈下：長期間にわたり土中の水分が搾り出されることにより生じる

☆ 圧密沈下：粘土層において地震などの短期応力による圧密沈下の検討は不要

☆ 圧密沈下：過圧密された粘土層では地中応力が先行圧密応力以下ならば沈下量を無視できる

☆ 圧密沈下：含水比が大きい地盤では一次圧密終了後もクリープ的な二次圧密沈下にも留意

☆ 即時沈下：砂質土において単位面積あたりに等しい荷重を加えた場合、基礎面積が大きいほど即時沈下量は大きい



(D') 液状化

- ☆ 液状化：土中の間隙水圧が高くなり、土粒子間に働く有効応力が0になる現象
- ☆ 液状化：噴砂現象を生じる事がある
- ☆ 液状化：粒径が比較的均一でゆるい飽和地盤や細粒土含有率が低い地盤では地震動により液状化が生じやすい
- ☆ 液状化：細粒土含有率（粒土分布）が低い、N値が小さい、地下水面が高い程起こりやすい
- ☆ 液状化：自然含水比が液性限界よりも大きい土は液状化の可能性あり
- ☆ 液状化：比較的新しい埋め立て地盤のみならず、時間の経過した砂質地盤の湖沼埋立地についても留意
- ☆ 液状化：発生の恐れのある地盤においては水平地盤反力係数を低減する
- ☆ 液状化判定：地表面から20m程度以内の深さの沖積層で細粒土含有率が35%以下の場合に必要
- ☆ 液状化判定：地震の地表面水平加速度を損傷限界で $150\sim 200\text{cm/s}^2$ 、終局限界で 350cm/s^2 と想定し検討

1.3.2 基礎の設計

(A) 直接基礎

- ☆ 地盤の許容応力度：支持力式による算定では、基礎荷重面の形状・大きさ・根入れ深さにより変化する
- ☆ 地盤の許容応力度：支持力式による算定では、土の性質の内、単位体積重量、粘着力、内部摩擦角を用いる
- ☆ 地盤の許容応力度：支持力式による算定では、地盤の内部摩擦角、粘着力が大きいほど高い
- ☆ 地盤の許容応力度：支持力式による算定では、短期許容応力度の値は長期許容応力度の値の2倍とはならない ⇒ 以下参照
⇒ 算定式上は2倍なんだけど…式中の係数の値が短期と長期で異なるので、最終的に値としては2倍とならない！怒
- ☆ 地盤の許容応力度：平板載荷試験における算定では、短期は長期の2倍にはならない（根入深の効果が長期＝短期なので）
- ☆ 地盤の許容応力度：基礎の根入れ効果を加算しないほうが安全側の計算となる（考慮しなくてもクリアするならなお安全）
- ☆ 地盤の許容応力度：岩盤＞密実な砂質地盤＞粘土質地盤
- ☆ 地盤の許容応力度：深さ方向に地質が同じ地盤ならば深い地点の方が大きい
- ☆ 地盤の許容応力度：傾斜地のほうが水平地盤よりも極限鉛直支持力（地盤の許容応力度）は低い
- ☆ 支持力の確認：浅い砂質地盤（深さが基礎幅の2倍以下）の下に粘土層がある場合には、その粘土層の支持力も要確認
- ☆ 支持力：内部摩擦角が10度以下の場合、基礎底面の最小幅が大きくなってても支持力は変化しない
- ☆ 支持力：地盤の極限鉛直支持力は、地盤のせん断破壊が生じることにより決定
- ☆ 許容地耐力：許容支持力と許容沈下量を考慮、いずれか小さいほうの値を採用
- ☆ 単位容積重量：地下水位以下の地盤の単位容積重量は水による浮力を差し引く
- ☆ 地盤特性：地震動が作用している軟弱な地盤では地盤のせん断ひずみが大いほどせん断剛性が低下し、減衰定数が増加
- ☆ 地盤特性：緩い粘性土地盤の地震動せん断剛性の低下よりも、緩い砂質地盤の液状化のほうが急激
- ☆ 地盤特性：超高層建築物においては、地盤の構造と動的特性を把握するためにP波とS波の速度分布を調べるPS検層が必要
- ☆ 耐力：水平力に対して基礎底面と地盤との摩擦により抵抗可能（液状化などの地盤破壊がなく、偏土圧等がなければ）

(B) 杭基礎

次ページ以降に統合



(C) 杭の支持力算定

- ☆ 杭の支持力：支持杭の支持力の算定においては、先端の支持力に杭周囲の摩擦抵抗を加算して求める
- ☆ 杭の支持力：鉛直載荷試験または施工方法を考慮した支持力算定式により評価を行う
- ☆ 杭の支持力：杭基礎の許容支持力は杭の支持力のみで、基礎スラブ底面の地盤の支持力は加算しない
- ☆ 杭の支持力：杭先端の地盤の許容応力度を計算で求める場合のN値は、先端付近のN値の平均とする（ただし、最大で60）
- ☆ 杭の耐力：地盤の変位に起因する杭に生じる応力も考慮
- ☆ 杭の耐力：圧密沈下が生じやすい地盤において杭頭が露出する場合には突出部の水平耐力も考慮
- ☆ 極限周面摩擦力：砂質土、粘性土それぞれの極限周面摩擦力の和で算定
- ☆ 要求性能：地盤に要求される性能は、地盤全体の安定性が失われないこと・杭基礎の最大抵抗力に達しないこと
- ☆ 要求性能：杭基礎の終局状態に要求される性能は、脆性破壊を起こさない、変形限界に達して急激な変形を起こさない

(D) 杭の支持力に影響する要素

- ☆ 群杭：単杭とみなした場合の一本あたりの耐力の総和よりも耐力は低くなる
- ☆ 群杭：抵抗力は、「群杭全体としての抵抗力」と「各単杭の引き抜き抵抗力の合計」のうち小さい方
- ☆ 群杭：一本あたりの杭頭荷重が同じ場合の沈下量：群杭 > 単杭
- ☆ 負の摩擦力：圧密未完了のシルト層、途中に粘性土にはさまれる砂質土がある場合、負の摩擦力の検討必要
- ☆ 負の摩擦力（杭周囲に下向きに作用する力）が生じると、杭先端部に加わる軸方向力は増加する
- ☆ 負の摩擦力：支持杭の場合に影響が大きい、摩擦杭の場合は考慮不要
- ☆ 負の摩擦力：杭先端以深が地盤沈下を起こしている場合、負の摩擦力は働かない
- ☆ 負の摩擦力：負の摩擦力が生じている場合には杭中間部が最も大きな軸力を受ける（実は先端部よりも大きい…）
- ☆ 負の摩擦力：杭の長期荷重算定時には杭に作用する負の摩擦力も考慮するが、地震などの短期荷重に関しては考慮しなくても良い
- ☆ 負の摩擦力：地盤の先行圧密応力以上に荷重が加えられる場合にはいかなる地盤においても負の摩擦力を考慮する
- ☆ 負の摩擦力：負の摩擦力を受けている場合には、杭の沈下量・基礎の変形・基礎の傾斜・杭の強度の検討が必要

(E) 杭の水平耐力

- ☆ 杭頭応力：杭頭が固定の場合、水平地盤反力が大きいほど杭頭の曲げモーメントは小さい（上部構造のせん断力が小さくなるので）
- ☆ 杭頭応力：杭頭の固定度が高いほど杭頭の曲げモーメントは大きく、地中部分の最大曲げモーメントは小さい
- ☆ 杭頭応力：杭頭は各応力に対して強度・変形性能を有すること
- ☆ 杭頭変位：杭頭の水平変位は杭の曲げ剛性・地盤反力係数・杭径が大きいほど小さくなる
- ☆ 杭頭変位：杭頭の固定度が高いほど、水平変位は小さくなる
- ☆ 杭頭応力/変位：短杭の変位・曲げモーメントを求める場合、杭剛性、支持地盤の強さ、杭先の貫入深さを考慮
- ☆ 杭頭応力/変位：杭頭接合部については各応力に対する強度、及び変形性能を有する設計とする
- ☆ 杭頭固定度：杭に水平耐力を負担させる場合には杭頭を固定として計算
- ☆ 水平力低減：地下室を設けると、杭頭に働く水平力を低減させる効果あり
- ☆ 水平力低減：地震時に杭に作用する水平力は、建物地上部高さ・根入れ深さに応じて一定範囲において低減可能
- ☆ 杭に作用する水平力：建物地上部分高さ・基礎スラブの根入れの深さに応じて低減することが可能



(F) 水平載荷試験による杭の水平耐力の確認

- ☆ 水平地盤反力係数：杭幅（杭径）が大きくなるほど小さい値となる
- ☆ 水平地盤反力係数：地震時に液状化の可能性がある場合には、水平地盤反力係数を低減して杭の水平耐力の検討を行う
- ☆ 変形係数：杭の水平耐力を検討する際に用いる変形係数はボーリング孔内水平積荷試験により推定可能

(G) 留意すべき事項

- ☆ 地下階を有する建築物でさえも全体の水平力の3割以上は杭に負担させる（ただし、両耐力は分けて検討する）
- ☆ 基礎面下の地盤の破壊時に、すべり面の及び範囲は基礎底面から幅の2倍程度に渡る
- ☆ 杭基礎引き抜き荷重：地下部分の浮力、地震・暴風時の建物転倒モーメントを考慮、ただし杭の自重はプラス要因
- ☆ 軟弱地盤に計画する場合は、地震時の杭頭慣性力と地盤変位との影響を重ね合わせて設計を行う方法もあり
- ☆ 杭径が同じでも支持層が傾斜して杭長が異なる場合には各杭に負担する水平力は異なる

(H) 各種杭

- ☆ 支持力：既製杭の支持力においては、埋め込み工法（予め孔を掘る、静か）の場合は打撃工法の場合よりも低く設定
- ☆ 許容圧縮力：既製杭の許容圧縮力は杭の長さ径比に応じて低減する
- ☆ 許容圧縮力：泥水中で現場打ちコンクリートを打設する場合の長期許容圧縮応力は1/4.5、泥水なしで1/4とする
- ☆ 先端支持力：打ち込み杭 > 埋込み杭（セメントミルク工法） > 現場打ちコンクリート杭
- ☆ 先端支持力：現場打ちコンクリート杭において、孔底のスライムは先端の支持力を低下させる
- ☆ 継手：既製杭の溶接継ぎ手が十分な施工管理のもとに溶接される場合は継ぎ手の耐力低下を考慮しない
- ☆ 杭の沈下量：埋め込み杭 > 打ち込み杭
- ☆ 周面摩擦力度：現場打ちコンクリート杭 > 埋込み杭（セメントミルク工法） > 打ち込み杭
- ☆ アースドリル工法：現場打ちコンクリート杭、孔内に安定剤を注入すること
- ☆ 腐食代：鋼杭の腐食対策として、防錆塗装を行わず腐食分を予め見込んで杭の肉厚を増す方法もあり

1.3.3 基礎スラブの設計

- ☆ 沈下：即時沈下量は基礎の短辺長さ、沈下係数、基礎にかかる荷重に比例
- ☆ 沈下：底面積の異なる直接基礎に単位面積当たりに同一の荷重が作用する場合、底面積が大きいほうが即時沈下は大きい
- ☆ 沈下：地盤沈下・液状化等の地盤変状による影響も考慮し設計を行う
- ☆ 基礎形状：独立フーチング基礎では、採用時に不同沈下の心配がある場合には基礎ばりの剛性を高めておく
- ☆ 基礎形状：連続フーチング基礎では、地盤反力によって基礎ばりに生じる曲げモーメントの分布は上部構造のはりの逆になる
- ☆ 基礎形状：独立基礎よりもべた基礎の方が圧密沈下に関する許容沈下量は大きい
- ☆ 支持力：極限鉛直支持力＝基礎底面積×極限鉛直支持力度（地盤の粘着力+地盤自重+根入れ効果）
- ☆ 支持力：許容支持力度は基礎の根入れ深さが深いほど大きくなる
- ☆ 支持力：直接基礎の鉛直支持力を算定する際の地盤定数は、地盤の粘着力、地盤の内部摩擦角、根入れ部の土の重さを考慮
- ☆ 支持力：地下水位が高いほど直接基礎の支持力は低下する
- ☆ 支持力：許容支持力度は基礎底面の形状により変化、地震時の水平耐力は基礎底面と地盤の摩擦により生じる
- ☆ 基礎部重量の扱い：基礎構造に対する地震時設計外力算定時には基礎部の重量も考慮する



- ☆ 基礎部重量の扱い：基礎スラブの構造強度の検討時には基礎スラブの自重は（および埋め戻し土の重量も）含めない
- ☆ 基礎部重量の扱い：基礎にかかる固定荷重は基礎スラブ上の土被りも考慮
- ☆ 基礎構造に対する地震力は地盤の地震応答や地盤と基礎の動的相互作用の影響を加味する
- ☆ 底面摩擦：上部構造からの水平力に対し、基礎底面と地盤との摩擦力により抵抗可能（ただし、液状化などがなければ）
- ☆ 変形・傾斜：基礎の変形角・傾斜角は上部構造に対する影響を確認するための項目
- ☆ 傾斜地：傾斜地盤に基礎を設ける場合には傾斜への滑りだしの検討が必要、平坦地盤よりも耐力低下するので注意
- ☆ 設計時に考慮すべき荷重：上部構造体からの軸力・水平力・曲げ、基礎自重、埋め戻しの土重量
- ☆ 異種基礎併用：異なる種類の基礎を併用する場合は不同沈下に注意
- ☆ 異種基礎併用：パイルド・ラフト基礎：パイル（杭）とラフト（直接）の併用基礎、両者が対抗、不同沈下には留意

1.3.4 擁壁

(A) 荷重

- ☆ 水圧：地下水位が高いほど地下外壁に作用する圧力は高い
- ☆ 水圧：擁壁背面に排水層を設けると土圧、水圧の低減
- ☆ 土圧：擁壁の設計に用いる土圧は、主動土圧とし、必要に応じて地震動を考慮した土圧も検討する
- ☆ 土圧：受働土圧は、擁壁等の構造体が土に向かって移動した場合の圧力（土から離れる側に移動した場合の圧力は主動土圧）
- ☆ 土圧：地震時に作用する主動土圧は通常時の 20～30%増し程度（震度 $k=0.2$ 程度ならば）
- ☆ 土圧：地下外壁に作用する土圧＝地表面荷重が無い場合の土圧＋地表面の等分布荷重に静止土圧係数を乗じた値
- ☆ 土圧：擁壁に作用する土圧は背面土の内部摩擦角から求めた主動土圧係数を用いて算定する
- ☆ 土圧：擁壁に作用する土圧の合力（分布荷重の集中荷重化）は基礎底部より鉛直上方 $H/3$ の位置に作用するものとして計算
- ☆ 土圧係数：受働土圧（2～3） > 静止土圧（0.5） > 主動土圧（0.2～0.5）
- ☆ 水圧/土圧：作用する土圧は背面土の内部摩擦角が大きくなるほど小さくなる

(B) 設計

- ☆ 設計：擁壁基礎のすべりに対する抵抗力は土圧等による水平力の 1.5 倍を上回ること
- ☆ 設計：安定モーメントは、土圧等による滑動モーメントの 1.5 倍を上回るように設計する
- ☆ 設計：大地震の際にも滑動が生じないように設計を行う
- ☆ 設計：擁壁のフーチング底面の滑動への抵抗力は、粘土質地盤よりも砂質地盤の方が大きい（摩擦係数が大きいから）
- ☆ 設計：長い擁壁には伸縮継ぎ手が必要
- ☆ 設計：擁壁背面の排水が困難な場合には水圧も考慮して設計を行う
- ☆ 設計：L 型擁壁のフーチング上の土の重量は、擁壁の転倒に対する抵抗として考慮することができる
- ☆ 設計：極端に地盤条件が変化する箇所に長く続く擁壁は 30m 毎に伸縮継ぎ手が必要



【memo】

